

令和6年度実施 教員採用試験の結果と考察 ～ 教育学部開設のタイミングで過去最高の成績達成 ～

教職支援センター

特任教授 宮本 晃郎

2025年（令和7年）4月に、神戸女子大学に教育学部が開設されることになった。

本学のホームページには、「教員採用試験の高い合格実績を持つ本学に、2025年4月に教育学部教育学科が誕生します。前身の文学部教育学科による実践力を身につける学びとともに、教員を目指す学生には専門部署『教職支援センター』がしっかりサポートします。」とある。

そして、「教育学部では、さまざまな事情のある子どもたちに柔軟に対応できる教員を養成するため、特別支援学校教諭一種免許状を取得できるカリキュラムを設けます。」と新たな魅力を伝えている。さらに、「教員免許の取得や採用試験の合格をゴールとせず、教員として働き出してから悩みや不安を、卒業後も先生や学生と交流できるネットワークを設けることで、教員という仕事を長く続けられる取り組みを進めていきます。」と宣言している。

全国的な少子化と教職離れが進んでおり、本学の教員採用試験の受験生も減少しているが、令和6年度実施の教員採用試験では、過去最高の成績となった。こうした実績が、現高校生にも伝わり、教職を目指す入学者数が回復していくことを切望している。

1. 教員採用試験の新たな変化

学校現場では、「教員不足」が一段と深刻化している。一部の自治体では、欠員状態が続いた場合には、その穴埋めをしている教職員に手当を支給することになった。何よりも各教育委員会は、教員不足解消のためにも教員採用試験の内容と方法に工夫を加えて、教員の確保を目指している。倍率が低下し続ける自治体が続出しており、とにかく「受験してもらうことが至上命令」となっている。そのため、かつてない勢いで教員採用試験が大きく変化してきた。

当初は、受験者の「負担軽減」や「利便性」「特例措置」に着目した改革が中心で、次のような形で「受験のハードル」を下げる方向で年々進んでいくことになった。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 受験内容の縮減（実技や小論文等の廃止）や試験時間の短縮2. 筆記試験等の免除要件の増加（大学等推薦を含む多種多様な特例措置）3. 受験会場の増設（例；地方自治体の首都圏会場や関西会場の新設）4. 多種多様な加点制度（複数免許・司書教諭資格・スクールサポーター等の現場体験）5. 地元優先や現職特別待遇等の特別選考（例；僻地希望者優遇制度などの導入） |
|---|

そして、大きな変化となったのが、「受験機会」の増加として、次のような改革であった。これらの改革は、長い教員採用試験の中でも、特に大きな変化であった。

- 6. **大学3回生等の受験機会**（3回生で完結する自治体も／受験合格すれば加点も）
- 7. **教員免許をもたない人も受験可能**（試験合格後に免許取得の支援策を実施）
- 8. **秋受験や冬受験の機会**（夏受験の結果を踏まえて柔軟に追加実施）

上記の改革には懐疑的な意見もあったが、「背に腹は代えられない」との判断なのか、3回生受験は全国的に広がることになった。課題の検証も不十分なまま、他の自治体がしている以上「自分のところもしないわけにはいかない」や「議会からの突き上げもあって、やれることはすべてやる」という人事担当者の声も多い。

そして、各教育委員会は、受験者を増やす努力として、次のような方策も採り出している。

- 9. 採用数を**大幅に上回る合格者発表**（合格後の辞退者を見込んでの措置）
- 10. 任期付き教員や補欠合格、**追加合格の大胆な増員**（繰り上げ合格の増加）
- 11. 正規教員だけでなく臨時講師にも**早期に内定通知**の発送（他都市流出防止策）

さらに、次のような新機軸も打ち出す自治体が出てきて話題になっている。

- 12. 合格者の**事前研修**の充実や**経済的援助**の増加（日当の支給）
- 13. **初任給や諸手当**の増額（例；大阪市や横浜市、川崎市の30万円オーバーの初任給）
- 14. 大学生の**奨学金返還**に対する各種支援策（数百万の借金一部返済サポート）
- 15. **希望地又は近隣での配置校決定**（配慮ある自治体としての印象・口コミへの期待）
- 16. **自治体独自の休暇策や定数改善**（例；GW等での休日確保や30人学級、加配教員）

文科省は、教員採用試験の標準日を令和7年度では5月11日として、統一的な筆記試験の問題作成を提案しているが、各自治体は独自の判断を貫き、混沌とした状況のままである。

このような「変化の激しい教員採用試験」や「自治体の独自色が強い教員採用試験」の状況を踏まえて、教職支援センターも柔軟に対応していくことが求められる。

2. 教職支援センターによる着実な取組と新たな取組

教職支援センターの組織運営については、毎月開催される「教職支援センター運営委員会」を軸に展開されている。年間の取組については、年度当初に「教職ガイダンス」を開催して、各学年に応じてプログラムを用意している。

1回生については、自発的に教職支援センターに来室して個別相談等に対応している。

2回生については、3回生受験を目指す学生の増加もあって、令和6年度から「教保ワークショップ」を定期開催し、「学内説明会」への参加も呼び掛けた。

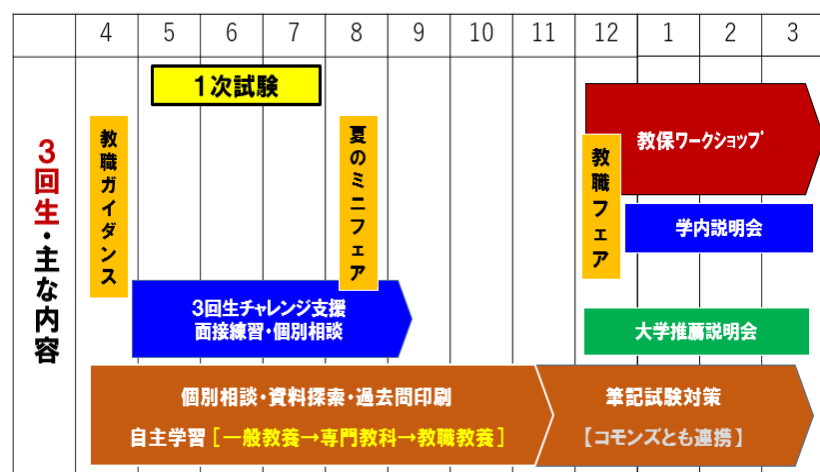
3回生については、4回生と合同で「面接研修」にも参加できるようにするとともに、秋口から個別面談を丁寧に行い、採用試験に向けての筆記対策も含めて、様々な準備が進むように助言してきた。

4回生については、「教保ワークショップ」を毎週実施して、教採対策のポイントを共通理解

するとともに、「自分たちで学んでいく場」も設定して、勢いをつけるようにしてきた。事務手続きの「漏れや抜け」をなくすとともに、「勉強の仕方」や「面接の課題克服」に関する内容を重点的に取り上げていくようにした。

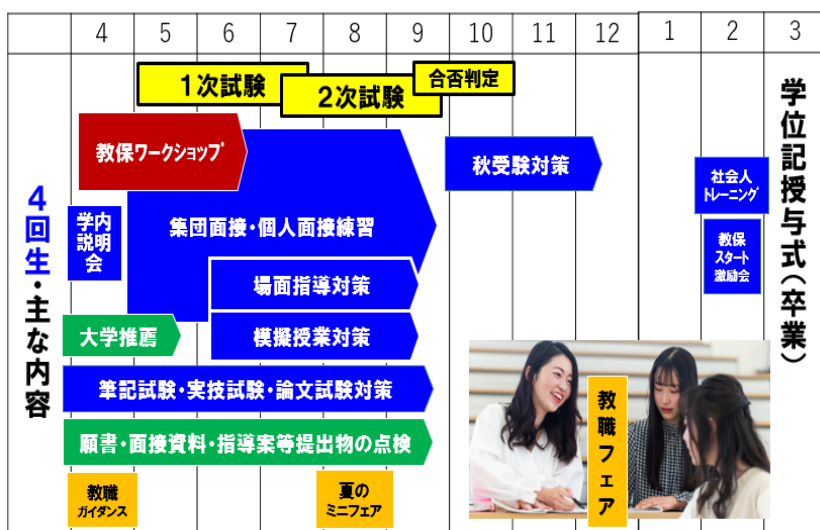


学生の多くは、教職支援センターで自学自習をする。中高の教科書や各種参考書・問題集で学び直している。数学や理科の解き方についてアドバイスを求めることも多い。



講座「エッセンシャル・サイエンス」も各学年に浸透しており、ライブラリーコモンズの活用とともに、筆記対策の大きな支援策となっている。

最近の傾向としては1、2回生から「勉強の仕方」について相談に来たり、先輩の残した資料を閲覧したりすることが増えている。過去問を印刷する学生も多い。



また、教育実習やスクールサポーターなどに関する相談も多い。

アンバサダー制度の導入もあって、一段と後輩に温かく助言する姿も見受けられ、神女のよさである縦の関係が築かれている。

3. 令和6年度実施の教員採用試験結果と経年変化〔令和7年2月時点〕

令和6年度実施の全体の結果を示すと、次のような結果であった。

	総受験者	1次試験合格+推薦	2次試験合格
①公立幼保	36(50)	31+0(38+0)	28(19)
②小学校	155(154)	101+26(126+19)	104(83)
③中・高等	79(60)	35+21(20+10)	33(17)
④養護教諭	7(9)	2+0(0+1)	0(0)
⑤栄養教諭	13(5)	7+1(2+0)	2(0)
全体合計	290(278)	176+48(186+30)	167(119)

注：私立幼稚園・私立保育園・認定こども園は除く。()は昨年度の数。

のべ人数

注：学内教員向けデータのため取扱注意。2025年1月10日付教職支援センター調べ。以降、「取扱注意」とのみ表記。

2次試験を受験したのは195人。そのうちの167人が合格したため、2次試験合格率は実質的には約86%という驚異的な高さになっている。

このあと、校種別・職種別でデータを示して、経年変化にも着目していきたい。

①公立幼保	総受験者 A+B	推薦免除 A	1次受験 B	1次合格 C	2次辞退 D	2次受験 A+C-D	2次合格 E	任期付き合格	最終辞退 F	最終採用 E-F
2021	72		72	46	3	43	29		0	29
2022	39		39	20	0	20	15		0	15
2023	50		50	38	6	32	19		0	19
2024	のべ36		36	31	1	30	のべ28	一部は3次試験もあり辞退者も		実人数15

参考資料：「私立幼稚園・私立保育園・認定こども園」

取扱注意

	R3 (R2実施)	R4 (R3実施)	R5 (R4実施)	R6 (R5実施)
私立 こども園 (保育所型)	4	1	1	0
私立 こども園 (幼稚園型)	1	1	1	2
私立 こども園 (幼保連携型)	17 (内2辞退)	28	30	20
私立 保育所	17 (内3辞退)	15	20	7
私立 幼稚園	5	3	1	2

幼保の各自治体関係部局や関係園所が多数参加しており、今後も学生の進路選択には大きな役割を果たすと思われる。公立幼保における高い合格率とともに、多種多様な私立の選択肢があることをアピールして、神戸女子大学教育学部への受験者増につなげたいところである。

のべ総受験者290

人のうち、1次試験合格者と大学推薦を合わせると224人である。つまり、1次通過者の割合は約77%となる。

この1次通過者のうち29人が2次試験を辞退したため、実際に

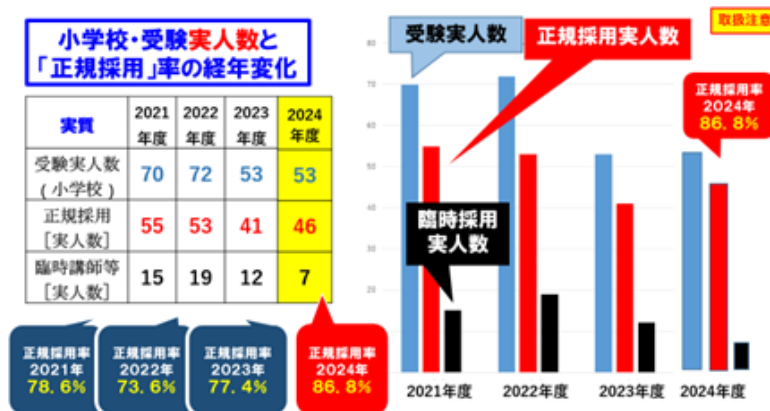
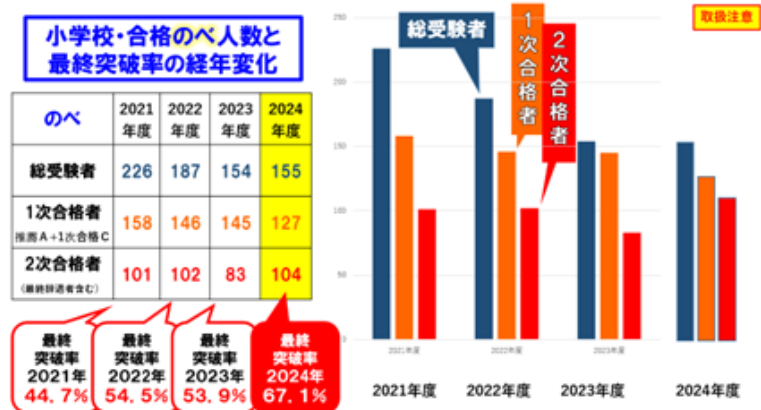
公立幼保は、総受験者が2021年から半減している。それでも、高い合格率を誇り、大健闘していると言える。

他の校種と異なり、3次試験を設定する幼保も多い。

一方、私立幼稚園や私立保育園、認定こども園の結果については、左の通りである。令和6年度も「幼保連携型」の認定こども園に合格・就職する学生が圧倒的に多い。

毎年冬に開催されている「教職フェア」では、

② 小学校	総受験者 A+B	推薦免除 A	1次受験 B	1次合格 C	2次辞退 D	2次受験 A+C-D	2次合格 E	最終辞退 F	最終採用 E-F	取扱注意
2021年度	226	18	208	140	25	133	101	45	56	
2022年度	187	23	164	123	20	126	102	54	48	
2023年度	154	19	135	126	18	127	83	40	43	
2024年度	155	26	129	101	14	113	104	58	46	



引き続いて、小学校から順々に校種や職種別の結果を示したい。

小学校は、2次合格者が過去最高の104人になった。「のべ人数」における「最終突破率」でも過去最高の67.1%となった。

そして、「実人数」での「正規採用率」においても過去最高の86.8%を記録することになった。

全国的には倍率が低下している小学校でも、兵庫県や神戸市は他府県・他都市に比べて倍率が高いままである。本年度、過去最高の成績が収められた要因として考えられるものは何か。

例年同様に「学生本人の努力」に勝るものはない。また、「ゼミ教員や担任のサポート」や「複数受験の効果」もあるだろう。それ以外では、「大学推薦」の効果的な活用もある。

特に神戸市の推薦を受けることにより、免除された1次試験の実施日に、他の自治体（近畿圏中心）を受験することも可能となる。結果として、神戸市も他都市も合格するというケースが増えている。

全体としては、学生自身が筆記対策の時から熱心に取り組み、友達同士で切磋琢磨していることが大きい。さらに、休日を含めて面接練習に積極的に参加する学生は、驚くほどに「自己表現力」が高まり、2次試験合格の率を上げていると考えられる。残念ながら、面接練習を休みがちな学生は、不合格率が高く、ここに「極めて強い相関関係」があることが分かる。

小学校では、3回生受験者も増えてくる予想があり、来年度が一段と楽しみである。

③中・高校	総受験者 A+B	推薦免除 A	1次受験 B	1次合格 C	2次辞退 D	2次受験 A+C-D	2次合格 E	最終辞退 F	最終採用 E-F
2021年度	40	3	37	22	3	22	13	4	9
2022年度	47	10	37	20	2	28	25	13	12
2023年度	60	10	50	20	7	23	17	5	12
2024年度	79	21	58	35	13	43	33	11	22



教科別	国語	社会	家庭	英語	保体	合計
2021 (令和3) 年度	受験者実数 2	2	5	6		15
	合格者実数 0	1	5	2		8
2022 (令和4) 年度	受験者実数 4	6	6	3		19
	合格者実数 4	0	6	3		13
2023 (令和5) 年度	受験者実数 3	9	7	3	3	25
	合格者実数 3	0	7	1	1	12
2024 (令和6) 年度	受験者実数 6	3	15	2	2	28
	合格者実数 5	1	12	1	1	20

中学校・高等学校についてはこの3年間で受験者数が大幅に増えたことが特色である。

2021年と2024年とを比較すると、「総受験者数」では40人から79人。「実人数」も15人から28人と、ほぼ倍増している。

これには、様々な要因が考えられる。学校現場に出た先輩の声として「教職のやりがい」が伝わっていること。

そして、学科やゼミの仲間と情報交換する中で、「一緒に教職を目指そう」と励まし合う関係ができていることが大きい。

さらに、大学等推薦の教科や人数が徐々に拡大されていることも追い風となっている。

教保ワークショップへの積極的な参加や、自治体別面接練習に対する熱心な取組も特筆すべき点である。こうした努力の結果として、実人数における正規採用率(いわゆる現役合格率)が驚異の71.4%である。

左の表は、教科別受験者実数と合格者実数である。ポアイの健康スポーツ栄養学科からも難関の保健体育科の教師が輩出されるようになった。家庭科や国語科も高水準が継続し、社会科や英語科もかなり健闘していると言える。

④ 養護教諭	総受験者 A+B	推薦免除 A	1次受験 B	1次合格 C	2次辞退 D	2次受験 A+C-D	2次合格 E	任期付き合格	最終辞退 F	最終採用 E-F
2021	1		1	0	0	0	0		0	0
2022	6		6	1	0	1	0		0	0
2023	9	1	8	0	0	0	0		0	0
2024	7	0	7	2	0	2	0		0	0

⑤ 栄養教諭	総受験者 A+B	推薦免除 A	1次受験 B	1次合格 C	2次辞退 D	2次受験 A+C-D	2次合格 E	任期付き合格	最終辞退 F	最終採用 E-F
2021	3		3	1	0	1	1		0	1
2022	7		7	1	0	1	0		0	0
2023	5		5	2	0	2	0		0	0
2024	13	1	12	7	1	7	2		1	1

3回生受験 全13人受験 うち7人合格 合格率54%	小	兵庫県	○	中高・国	兵庫県	○
	小	兵庫県	○	中高・国	兵庫県	○
	小	兵庫県	✕	中高・国	兵庫県	✕
	小	兵庫県	✕	中高・国	神戸市	✕
	小	神戸市	○			
	小	大阪府	○			
	小	大阪府	✕			
	小	香川県	✕			
	小	香川県	✕			

小学校 4/9 合格 中学校 3/4 合格

大学推薦	令和 3年度	令和 4年度	令和 5年度	令和 6年度
小学校 合格/受験	10/18	17/23	14/19	22/26
合格率	55%	74%	74%	85%
中高養栄 合格/受験	6/12	8/10	3/11	12/21
合格率	50%	80%	27%	57%

養護教諭の倍率は、全国的に極めて高い。本学生も果敢に挑戦している。

この3年間、一定の受験者がいることを踏まえ、今後も学科と緊密な連携をしていきたい。ポアイキャンパスでの教保ワークショップや面接練習の機会も徐々に進んでいる。

栄養教諭も、高い倍率ではあるが、総受験者が13人と大きく増えた。1次合格率も初めて5割を超え、2次合格者2人となった。一人は別の栄養関係の就職が内定していたため、結果的には辞退となったが、驚異的な合格率を達成している。後輩にとっても希望となる躍進である。

左の表は、3回生受験の結果である。神戸市、兵庫県、大阪府、香川県の4自治体ではあるが、今後はさらに広がることが考えられる。

大学推薦については、利用する学生が年々増えている。小学校では、85%という高い合格率になっている。

中高養栄では、利用者が倍増し、初めて合格者も二けたになっている。さらに、合格率を上げたいところである。

4. 令和7年度以降の展望と教職支援センターの力点

(1) 改めて問い直された教員の資質能力

文部科学省の「教員をめぐる現状」によると、教員の資質能力が改めて問い直されている。

学校や教員に対しては、「社会構造の急激な変化への対応」が求められ、家庭や地域の事情も踏まえた「教育成果に対する期待の高まり」がある。

例えば、学力・気力・体力の低下を筆頭に、いじめや不登校、校内暴力、発達障害等への対応など課題の複雑・多様化と新たな研究の進展も強く要請されている。しかし、一部の教員の不幸事により、保護者や国民の信頼が揺らいでいることも事実である。

教員の多忙化と同僚性の希薄化や、退職者の増加、育児短時間勤務・育児部分休業・男性育児休暇取得・フレックス勤務等の働き方の変化もあり、学校現場は課題が満載である。

(2) 大量採用時代からの転換の可能性

ここ数年、教員採用試験での大量採用が続いているが、そろそろ採用数が減るのではないかととの予測が出始めている。65歳定年制の完結や35人学級の完結など段階的変化が終了する時期が近付いているからである。再任用制度が形を変えていくこともあり、65歳以上の雇用も増えて、多種多様な学習支援策を自治体ごとに進めている。

高齢者雇用によって、大量採用を控えて、人数調整を図る自治体も出てくる。急激な人口流出を続けている自治体と、反対に人口維持や増加している自治体とでは、当然対応が異なる。もちろん、正反対の意見もある。これは、「教員の定数改善」があるかないかで大きく変わるからで、今後この議論もさかんになることが予想されている。

(3) 神戸女子大学・教職支援センターの意義と役割

いずれにしても教員養成の大学・学部としては、教員採用数の増減に一喜一憂することなく「現場で通用する心と力のある教員」を養成していくことに専念していただくだけである。

神戸女子大学としては、教職を目指す学生が在籍するすべての学部学科・課程と連携・協働して、教育現場に有為な人材を輩出していくことが何よりの使命である。

その意味では、「教職支援センター運営委員会」が一層充実した審議や報告等を行うことで、よりよい方向性と具体的な施策等を今後も共通理解して進めていくことが重要である。

教職支援センターとしても、1回生に対する入学時点の「教職ガイダンス」を筆頭に、様々な広報活動を通して「立ち寄りやすいセンター」「相談しやすいセンター」の印象をもたれることを大切にしたい。教職課程の履修を筆頭に、学校インターンシップ・学校観察実習・スクールサポーター制度等の相談、教育実習や介護等体験などの手続きを含めて、頻繁に学生と関わる部署だけに、教員採用試験対策についても「早期に」「確実に」「頻繁に」関わっていくことを重視したい。

(4) 3回生受験や加点制度の変更と情報共有の努力

特に教員採用試験については、全国的に3回生受験が定着するとともに、大学等推薦制度の要件緩和や教科・人数の拡大、多種多様な加点制度など変化が激しいので、早い段階で学生に

情報提供を試みたい。現在も、教保ワークショップのような形で、「教員採用試験の概要説明」を行っている。その後は、「個別面談・個別相談会」のような形を採っている。

この企画そのものの目的・内容・方法等についても、教職支援センター運営委員会や各種の広報を通じて、教職に就く可能性のあるすべての学生と、その指導支援にあたる教員に情報が届くように努力していきたい。「教職支援センターだより」や「アンバサダー制度」も定着し、積極的に協力をしていただける教員も増えている。今後も「知らせる努力」と「知る努力」を積み重ねて、学生がよりよい教員・保育者となるような支援を続けたいと考えている。

（５）採用試験の新展開への対応と望ましい縦の関係

今後は、ＩＣＴ機器を活用した模擬授業や、新たな教育課題に基づく質疑応答や場面指導も増えてくることが予想される。それぞれの授業の中で、現場に即した内容や最新の知見を採り入れていくことが一段と求められる。学生のそれぞれの学びに着目しながら、一人一人のよさと課題をとらえて、教職支援センターとしても具体的に関わっていききたい。

そして、既卒生で臨時講師として働いている者や、現職教員として地元や他都市を受け直す者に対しても、休日に相談や面接練習等を設定して、アフターケアを続けたい。

最後に本学のよき伝統として、望ましい縦の関係（先輩・後輩の関係）が脈々と受け継がれている。既卒生による現役学生に対しての関わりは、夏の教職ミニフェアだけでなく、長期休業中等での自発的な交流活動もある。授業実践を筆頭に現場体験のエッセンスを、分かりやすく後輩に伝えている。既卒生が、模擬授業を実際に示したり、教材研究の足跡が残るノートを見せたりしている。生徒指導上のトピックについても、守秘義務を意識しながらリアルな事例を提供している。これらを直接学ぶことで、非常に大きな成果をあげている。

立派になった既卒生の姿は、現役学生にとっては「目標」であり「モデル」である。大いなる刺激となって、教員・保育者の採用試験を突破する強い動機付けとなっている。

（６）「夢の実現を目指す神女」における教職支援センター

教職支援センター運営委員会が、核となって「学内協力・連携」をさらに進めていく存在となることが期待されている。今後も教育実習や介護等体験、スクールサポーター、インターシップ等の様々な教育活動で、学科を越えて共通理解・共通姿勢で臨んでいくようにしたい。

そして、採用試験の突破にも関連して、各自治体の教育委員会事務局や保育関係部局等とのつながりを大学としても大切にしていきたい。とりわけ年末に移行した「教職フェア」も毎年工夫しながら修正を図ってきている。さらに、１回生と２回生の参加を強力に勧めて、大学を挙げての一大イベントとして関係教職員の参加協力をお願いしたいところである。

教職を目指す学生が、早い段階から高い意識と意欲をもって、あらゆる学内の学びを充実してもらいたい。自己理解を深め、受験地の選定も主体的に行い、採用試験に臨んでほしい。

そして、「採用試験は、団体戦」という言葉通り、切磋琢磨して『夢の実現を目指す神女』であり続けたい。ただ試験突破だけが目標ではないので、どの学生にも「社会人として通用する資質・能力」を培うことを念頭に置いて指導・支援を続けていきたい。

“教員になって活躍できる力”の育成に関する取組について

—教職支援センター主催事業を通して—

教職支援センター

特任教授 宮垣 覚

1 はじめに

本学の教職支援センターでは、教員・保育士採用試験の合格をめざし筆記試験対策や面接指導、模擬授業・模擬保育の練習など学生のニーズに応じた丁寧な支援を行っている。さらに、それだけにとどまらず、互いに協働的に学び合うワークショップやさまざまな主催事業などを通して“教員になって活躍できる力”の育成を目標に取り組んでいる。具体的には、

- ・面接指導等を通して自分を深く見つめ直し、自己理解を図ることで、自分の良さに気づき、教員・保育士志望の意志を固める。このことは、卒業生が「教員になってからも初心に帰る時の原点になっている。」とよく言っている。
- ・採用試験における15分程度の模擬授業・模擬保育のためだけの練習ではなく、授業のめあてを明確にし、1時間の授業をどう構成するかなどを検討することで授業力を育成する。
- ・教育実習・保育実習やスクールサポーターなどの学校園の現場における経験を踏まえ、場面指導等の練習の中で、事例の理論と実践の一体化を図りながら実践的指導力を育成する。
- ・「採用試験対策は団体戦」を合言葉に教職をめざす仲間と刺激し合い、支えながら長期にわたる採用試験を乗り越えたことが大きな自信となり、仲間と協働して取り組むことの大切さや有効性を実感する。

などが上げられる。

さらに、現役の先輩教員たちから話を聞く「夏の mini 教職フェア」、教員・保育士版合同説明会の「教職フェア」等を通して、4回生はもちろん、3回生受験にも対応するとともに、1回生から教職を志望する学生の裾野を広げる取組も行っている。そこで、今年度の教職支援センター主催事業について報告し、その効果や課題について考察する。

2 教職支援センター主催事業について

(1) 教保ワークショップ

「幼保」、「小学校」、「中・高・栄養」、「PI キャンパス」の4グループに分かれ、小学校の教育実習が終わった12月から翌年4月にかけて、週1コマずつ、教員・保育士採用試験対策のワークショップを行っている。内容は、採用試験の内容を知る、スケジュールづくり、筆記試験対策（数学、理科を中心に）、自己理解・自己PR、個人面接・集団面接、先輩合格者報告会、場面指導などで、これらを教職支援センターの教職員が以下のことを意識しながら分担して行っている。

- ・採用試験を中心とした生活やスケジュールに変えることで気運を高める。
- ・中学校・高等学校の教諭、栄養教諭の志望者は同じ学科内では少ないので孤独になりがちだが、他学科の仲間と共に取り組むことで、ネットワークを広げ、刺激し合い、支え合うことが自然に行えるようにする。
- ・諸連絡や提出課題を行う中で、「期限を守る」、「欠席等連絡をする」などをしっかり行い社会人としてのマナーを身につけることにも繋げる。

(今後にむけて)

3回生受験を実施する自治体も増えてきているので、2回生対象のワークショップを充実させていく必要がある。

また、二次試験対策も大切だが、まずは一次試験(筆記試験)対策がこの時期にはとても重要である。ワークショップと並行して、筆記試験対策の学習法等もアドバイスしながら進めており、次第に教職支援センターに自習や質問に来る学生が増えている。今後は採用試験が早期化していることへの対応も含め、早い時期から学習する気運を高めていく必要がある。



(2) 面接指導(集団・個人面接、模擬授業・場面指導を含む)

5月末から中学校・高等学校の教育実習が始まり、6月には、1次試験で集団討議・集団面接を実施する自治体もあるので、5月当初から面接指導を始めている。

最初は集団で行うことで、学生同士の情報交換の場となっている。校種を混ぜ、自治体ごとに分ける等毎回実施するグループも変えることで多くの仲間の回答や姿勢などを知ることができ、とてもよい刺激になっている。また、学生同士で自主的に模擬授業や集団討論等の練習も行っている。

ここでしっかり自分に向き合い、取り組んだ経験により、採用試験に自信をもって臨むことができる。さらにワークショップなどを通して、仲間と支え合って採用試験を乗り越えた体験などにより、本学の卒業生は学校園の現場で踏ん張りがきいており、それぞれの教育委員会等において高い評価を得ている。



(3) 第2回『夏の mini 教職フェア「教師」ホントにやってみた！—現役教員の先輩に聞いてみよう—』

目的 在学生が、先輩現役教員・保育士から仕事等の魅力ややりがい、生活の実態等を聞き、さらに実践に基づく模擬授業や模擬保育の指導を受けることで、教員や保育士を本気で目指そうとする姿勢を育む。

日時 2024年8月11日(日)
0:30～15:00

場所 須磨キャンパス A 館

参加者 学生 計36名

(1回生2名、2回生3名、3回生18名、4回生13名)

現役教員等 計24名(中高養栄8名、小学校10名、幼保・施設6名)

(兵庫県、鳥取県、徳島県、岡山県、佐賀県)

内容 図1に当日のプログラムを示す。

【午前の部】

- ・「ぶっちゃけ教師って!？」シンポジウム

教職支援センター教職員が司会をし、「幼稚園・保育園」「小学校」、「中・高・養・栄」に分かれ、年間・1日の具体的なスケジュール、最新の職場環境、給料や休みのことなど現役教員から本音で“リアルな教員生活”を聞くことができた。

【午後の部】

- ・現役教員8名による模擬授業

学生は、児童生徒になった気持ちで模擬授業を受けた。ICTを活用した模擬授業もあり、実際の授業のように引き込まれ、学校現場の“今”を体験した。

関東のある小学校では、板書等の記録を本人の希望によってタブレットとノートでとることができ、クラスの中に約半数ずついるという。今後、中学校・高等学校での指導に大きな影響を与えそうである。

《 午前の部 》 10:30～12:00

「ぶっちゃけ教師って!？」第2 回夏の mini 教職フェアシンポジウム

【A310 教室】	【A311 教室】	【A312 教室】
幼稚園・保育園	小学校	中・高・養・栄

《 午後の部 》 13:00～15:00

【A315 教室】	【A405 教室】	【A310 教室】	A 館 3 階廊下
<小中高栄> 公開模擬授業	<幼保> 公開模擬保育	<4 回生対象> 教採対策面接	個別相談

■タイムスケジュール・実施教室

10:30	ぶっちゃけ教師って!？第2 回夏の mini 教職フェアシンポジウム 【A310 教室】幼稚園・保育園 【A311 教室】小学校 【A312 教室】中・高・養・栄			
12:00	お昼休憩			
13:00	【A315 教室】 <小中高栄> 公開模擬授業	【A405 教室】 <幼保> 公開模擬保育	【A310 教室】 <4 回生対象> 教採対策面接	【A 館 3 階廊下】 個別相談
15:00				

図 1 当日のプログラム



- ・個別相談

模擬授業と同じ時間帯にシンポジウムでは聞き足りない学生のために「個別相談コーナー」を設けた。

現役教員の先輩を囲んでより具体的な質問をし、中には1対1で真剣に話す者もいてとても盛況であった。



- ・教員採用試験対策（模擬授業・模擬面接指導）

4回生6名が、現役教員の先輩の前でいつもの教職支援センターの教員による練習とは異なる緊張感の中で模擬授業と模擬面接を行った。

実施後は、現役教員ならではの視点から具体的なアドバイスをいただき、その後の教員採用試験に役立てた。



(学生の感想)

- ・先輩たちが楽しそうにやりがいを持ちながら働かれている様子を聞き、絶対に教員になりたいと思った。
- ・出勤時間、退勤時間、土日の過ごし方などを知ることができてとても良かった。
- ・知らないことが多くて不安が大きかったけれど説明を聞いてわかったことが増えた。
- ・リアルな話を聞くことができて、教職についてよく知ることができた。特に、給料のことなど少し不安に思っていたので安心した。
- ・休日も忙しいことが多いと思っていたけど、意外とゆっくり休めると聞いて少し安心した。
- ・保護者対応も、担任一人で頑張らなくてもよいということを聞くことができ、少し安心した。

(まとめ)

学生にとって現役教員の先輩は、身近なロールモデルであり、その言葉は刺激的であり不安をやわらげることもできる。子どもたちと日々格闘しながらも楽しそうな笑顔に勇気づけられることがこの取組の一番の効果だと考える。

現役教員にとっては、母校に戻り後輩と交流することで、初心を思い出すなどリフレッシュする機会となっている。

大学教職員にとっては、卒業生の成長を実感でき、各自治体における学校園の現場の最新情報が得られる貴重な機会となっている。

また、これらを可能にしているのが、本学の強味である先輩後輩のタテの仲がよいところである。各自治体において同窓生教員のネットワークもでき、独自に情報交換や支え合う活動を広げ、深めている。引き続き、教職支援センターとしても情報提供等支援していきたい。

(4) 第3回「教職フェア」

教職フェアでは、「本学の学生の教職志望者を増やし、主体的な自治体選択につなげ、教員・保育士採用試験の選択(自己決定)、合格・採用に結び付けるための『教員・保育士版』合同就職説明会」である。各自治体・教育委員会の採用担当者が本学須磨キャンパスに集まり、それぞれの府県や市等の魅力・やりがい、教育目標や教員への支援方策、採用試験の詳細内容などを直接学生に説明する。

2～3回生は、採用試験対策に直接活かし、1回生は、将来のイメージを具体的に意識するきっかけにしている。さらに、4回生は学生スタッフとして、合格した自治体・教育委員会をサポートすることで、個別に4月からに向けて相談をするなど関係が深まり、不安が軽減され、意欲も高まっている。

自治体・教育委員会にとっては、直接学生の声聞くことのできる場であり、他の自治体等との情報交換できる場にもなっている。

日 時 2024年12月26日(木)13:00～17:00

場 所 須磨キャンパス

参加者 参加学生数 計138名(1回生1人、2回生12人、3回生98人、4回生-院27人)

参加自治体・委員会等 32団体(内資料配布4)、83人(内遠隔1人)

<幼保対象> 13団体(内資料配布1)、53人(内遠隔1人)

明石市・赤穂市・芦屋市・加古川市・神戸市(幼)・神戸市(保)・姫路市(公)
姫路市(私)・洲本市・高倉台幼稚園・神女中山手保育園、

※遠隔：尼崎市、※資料提供：西宮市

<小・中・高・養・栄対象> 19団体(内資料提供3)、30人

愛媛県・大阪市・岡山県・岡山市・香川県・川崎市・京都府・神戸市・堺市
滋賀県・鳥取県・徳島県・豊能地区・兵庫県・横浜市・和歌山県

※資料提供：大阪府・京都市・高知県

交流会参加自治体・委員会等人数 54人

内 容

時間帯	行事	中高養栄会場	幼保会場
12:00～13:00	全体会(開会式)	A408教室	
13:00～16:00	説明会 Ⅰ部 15分で入替制 5分で次へ移動 Ⅱ部 15:00～16:00 フリータイム	各教室	食堂で ブース形式
16:00～16:15	全体会(閉会式)	A408教室	
16:15～17:00	交流会	食堂2階	



全体会（開会式）



説明会



フリータイム①



フリータイム②



幼保会場



交流会

（学生の感想）

- ・たくさんの自治体を回ることができ、情報収集がしっかりとできました。また、自治体別に雰囲気はかなり異なっており、参考になりました。
- ・実際に職員の方とお話ができ、その自治体の雰囲気などがわかって良かったです。
- ・はじめは考えていなかった自治体も、今回話を聞いて受けてみたいと思うこともあり、新たな発見があってとても良い経験となりました。
- ・募集要項などだけでは視野に入れていなかった県や地区について知ることができ、視野が広がりました。
- ・自治体のアピールポイントを基に、今後の受験についても一度考え直すきっかけになりました。
- ・とても参考になるお話を聞くことができて良かった。でも、よりどの自治体にするか迷いました。

(自治体・教育委員会の感想)

- ・多くの自治体の説明を受けることで自身のキャリア形成にも繋がっていくと思います。
- ・参加されていた学生の皆さんは大変熱心で、少しでも情報を吸収しようという姿勢が感じられました。貴学における学生への指導が日々行き届いていると感心いたしました。
- ・学生の熱心さがわかるよい機会でした。
- ・学生が様々な自治体の話を聞いて、比べ、自分の進路について考えていくというとても良い取り組みだと思います。来年度もぜひよろしくお願いします。
- ・学生の皆様と直接コミュニケーションできる貴重なご機会をいただき、学生さんの率直なご意見や他市のさまざまな取り組みを伺うことができ、大変勉強になりました。また今後活かしていきたいと思っております。
- ・学生の皆さんと直接交流できる機会となっており、貴学教職フェアの企画は全ての自治体にとってとても有効です。また、他の自治体の担当者の方との交流会も業務におけるヒントを得る機会にもなっており、ありがたいです。
- ・学生の教職への意識が高いと感じました。また、学生への指導が丁寧であることが学生との会話でよくわかりました。

(大学教員の感想)

- ・幼保会場がワンフロアに集まっていたので、学生は移動しやすく。自治体間の交流も活発でした。
- ・年々自治体・教育委員会の参加数も増え、学生のためにそれぞれ工夫をされ、採用する側の熱意が伝わってきました。
- ・聴く態度はもちろん、廊下を歩く様子も見ていただき好印象を持っていたようで、学生や大学のよいPRの場となっているようです。
- ・交流会等で直接人事担当者の方とお話しすることができ、最新の情報が得られ、今後の指導にいかしていきたい。

(交流会の感想)

- ・他府県の方々とも意見交流もでき、よい機会となりました。
- ・大学教員を囲んで4人掛けのテーブル席だったので、じっくり落ち着いて大学の現状を知ると共にお互いの情報交換等を行うことができました。

(まとめ)

「教職フェア」は、学生にとって採用試験に関する情報収集の貴重な機会となり、それを基に自分で考え、選択していく深い学びの場となっている。

参加した自治体・教委育委員会にとっては、学生へのPRの場で、直接学生の声を知ることができ、他の自治体、大学教員との情報交換等交流の場となっている。

大学にとっては、学生の様子を直接見ていただくことで、よいPRの場となっている。さらに、人事担当者と直接話をするすることで、最新の情報を得ることができ、今後の学生の指導

にいかすことができる。

準備等負担も大きいが、全国的に類を見ない参加者にとってとても有意義な取組であり、全学的な取組にしていくことも含めてさらに充実させながら続けて行きたい。

(5) 子どもを引きつけるテクニック講座（11月28日（木）4限 M206教室）

来年度教員になる4回生にむけて、理科の実験を使って授業などで子どもたちを引きつけるテクニックを伝授した。当日は14名が参加し、「えっ?」「あれ?」と自ら体験しながらまずは実験を楽しんだ。

内容は、挨拶ですぐに使える「エコマイク」。

そして、「バネ電話」、「コップに水を入れ金網で蓋をしてひっくり返すと・・・」、自然学校で廃材を使って作ることができる「念力振り子」。また、折り紙でマツの種・ツクバネの実の模型を作り、錘のクリップの大きさや位置を「工夫」し、クルクル回らせて飛ばした。

さらに、事前に空の500mLのペットボトルを持ってくるように指示しておいた。「これを使って何をするのだろうか?」とワクワクしながら参加することで、もう授業の導入はできている。魚の醤油入れとナットを使って「浮沈子」を作成!魔法のように思うままに上下に運動させて楽しんでいた。今年度就職した先輩教員が低学年の児童に操作してみせると人だかりになったという。高学年の児童は、自分で作成すると、勝手に操作し、浮沈子を2個入れるなどの工夫を始め、学びがどんどん広がっていく。

まとめとして、この講座をもとに以下のことを伝えた。

- ・授業はまず、教師自身が楽しむこと!
- ・準備段階から「授業」は始まっている。
- ・授業は、「ワクワク」と「?」を大切に
- ・そして、「工夫」を続けること
- ・こどもの笑顔を想像しながらの教採研究は楽しい!

(6) 社会人基礎トレーニング（2025年2月3日（月）、4日（火））

2か月後には教職に就く4回生を対象に「幼稚園・保育園等」、「小中高栄の教諭」、「講師」の3つのグループに分け、事前にしっかり準備をしておくことで不安を減らし、4月から自信をもって取り組めるように講義・演習を行った。



(内容)

- ・ 社会人・組織人・教職の使命・学び続ける教師等
- ・ 着任前後の心と物の準備・子供との出会い3ステップ
- ・ 職場における望ましい人間関係づくり
- ・ 危機管理と保護者対応
- ・ 服装コーデ・丁寧な言葉遣い・挨拶と電話対応

など、心構え・マナー的なものから、着任直後に使えることまで幅広い内容だった。

学生からは「服装や初日の動きなど細かなことはなかなか聞くことができなかったのも、とても役に立った。」「社会人になるんだという気になり、身が引き締まった。」「今、何を準備しておかねばならないかがわかった。」などとても好評であった。

特に「講師」のグループには、担当者が自らの経験を話し、来年度の教員採用試験に向けて当センターが卒業後も引き続き支援をすることを伝え、夢の実現への意志を固め気合を入れるよい機会となった。



(7) 教保スタート激励会 (2025年2月22日 (水) 10:30～ 須磨キャンパス H 館103室)

4月から、教員・保育士として働き始める4回生に対してエールを送る「教保スタート激励会」開催し、学生21名、教職員15名が参加した。

まず、学長から「教師という仕事は無くならない。教え子が憧れる先生になってください。」続いて教職支援センター長が「周りから、“かわいがられる先生”になってください。」とお祝いの挨拶からはじまり、記念撮影。続いてすべての学生からのスピーチでは「4年間の講義や実習等によって、教師になりたいという気持ちが固まり、多くの先生方のおかげで教師になれました。」「家から近いからと選んだ大学だったが、一緒に学び合う仲間ができ、先生方にたくさん支えていただいた。この大学に来て本当に良かった。」「4月からのことを考えると不安もあるが、自分らしく頑張ります。」などの感謝や決意表明があり、1分間にうまくまとめられてさすが先生と思わせるものだった。

それを受けて、教員からの30秒お祝いメッセージでは「皆さんはこの4年間しっかりと努力を積み重ねてきました。そのことに自信をもって、4月から持てる力を思いっきり発揮してください。」「不安を持つことは悪いことではない。不安があるからしっかり準備をし、反省もできる。」などの言葉があった。大学教職員にとって学生の成長を確かめることができ、これまでの取組

を振り返り、“教職員としてのやりがい”を実感できる。学生にとっては、これまでの感謝を伝え、決意表明をするというとても貴重な場である。「教職支援センターの卒業式」的行事であり、終始なごやかで笑顔あふれる会で、学生も教職員もお互い元気をもらい合う会となった。

今後は、さらにより多くの教職員・学生に参加してもらおう工夫を続け、会を盛り上げていきたい。



3 今後の課題について

教職支援センターの仕事はどうしても「教員・保育士採用試験の合格」に目が行きがちであるが、本来の目的は“良い先生の育成”であるべきである。我々は、合格がゴールではなく、学校園の現場で日々多様な子どもたちと向き合い、同僚たちと様々な課題に取り組んでいく、明るく前向きな“先生”を育成したいと考え、事業を企画・運営している。

本学の学生は、真面目で素直でやさしい。それを基本としてこれらの事業等を通してさらに他人の思いに応えられる社会人としての基礎を身につけ、学校園の現場でチームの一員となり、自分の個性を発揮しながら周りから“かわいがられる先生”を育成していきたい。

現在、全国的に教師志望者数が減少している中、教員養成系大学の担う役割は大きい。

まずは、教職に興味・関心を持たせるため、1回生から教職課程を履修し教員免許等の取得をめざす学生を増やすことが重要である。今回紹介した取組においても、直接受験に関係する3・4回生だけでなく、1・2回生の参加者数を増やし、教師のやりがいや楽しさを伝えていくことが今後の課題である。そして、引き続き学生の実態やニーズを把握し工夫を続け、さらに2025年4月から教育学部が創設されることを機に、他学部も含めて大学全体として教員養成の気運を高めていくことが重要である。

教育実習（模擬実習・教壇実習）について

—実習授業における危機管理—

日本語日本文学科

教授 安原 順子

1. はじめに

中学・高校の生徒や日本語学習者を対象にした教育実習(模擬実習・教壇実習)では、なにを教えるかという授業内容だけでなく、そのための「事前の準備」や「事後の振り返り」と同時に「授業中の危機管理」も重要である。突発的な事項に対して、どのように対処できるかという技術である。筆者は、日本語日本文学科に所属し、同時に外国人のための日本語を教える日本語教員の養成を担当している。日本語日本文学科では、毎年、国語科教員志望学生のために教育実習前に「教職研鑽会」実施し、日本語教員養成講座では、直接日本語学習者に教える「教壇実習」を実施している。その際にも、国語科教員と日本語教員双方にとって教育実習における「授業中の危機管理」は共通して重要な課題である。本稿では、「授業力」のひとつとして、教員に必要な「授業中の危機管理」について考える。

2. 「授業中の危機管理」とはなにか

授業中には、多くの「授業中の危機管理」が必要となる。国語科教員でも日本語教員でも、「授業中の危機管理」には共通する注意点が存在する。本稿では、その中から3つの注意点をあげ、より良い授業を行うためにその対策を考える。

(1) 授業時間の使い方

授業には制限された授業時間がある。定められた時間内に予定している授業内容は終えなければならない。授業時間を超過した授業、逆に時間が余った授業は良い評価を得られない。

(2) 質問に対する答え方

授業内での生徒や学習者からの質問には、原則その場で答えることが肝要である。しかし、すべての質問に、すぐにはうまく答えられない場合もある。

(3) ICT 機器の使い方

授業では、積極的に ICT 機器を使うことが多くなった。授業で効果的に ICT 機器を使用するには、入念な準備が必要である。

3. 「授業中の危機管理」における共通した注意点(授業中)

「2.」であげた3つの点が授業中に起こった場合の対応について、ここでは検討・対応策を考える。

(1) 授業時間の使い方

授業時間の使い方は、全体の授業時間により決まる。90分授業でも45分授業でも、全体をいくつかのパートに分けて準備をして実行することを提案する。例えば、45分では15分ずつ3つ

のパートに分ける、90分では30分ずつの3つのパートに分けて授業案を準備するということがある。しかしながら、実際の授業では多くの理由で時間通りに進まないことが大半である。このような危機の回避は、事前に通常の教案以外に多めの授業内容を準備しておくことで回避できる。つまり、通常の授業時間内で作成した授業案以外のもう一つの授業案を作成し、授業時間の推移を見ながら本来の授業案を追加・削除するという方法である。初中級レベルの授業では、追加分として同じ基礎練習(文型練習)を繰り返す、ということもできる。

(2) 質問に対する答え方

授業内の生徒や学習者からの質問には、原則授業内で答えることが原則である。しかし、すべての質問に、授業内で答えられない場合もある。授業内で質問に答える場合、事前の準備が必須である。つまり、事前に授業準備をする際、内容について質問が出るかもしれない箇所を確認して、答えや説明を準備しておくということである。学習項目についての質問は、ある程度事前予測ができる。

ただし、授業の場でどうしても答えられない質問があった場合は、どのように対処すべきだろうか。生徒や学習者にとって、質問に的確に答えられる教員は、理想的な教員である。答えられない場合には、教員としての立場も考えて次のような柔軟な対応をする必要がある。

- ・「授業時間内には十分な時間がないので、次回授業で答える」とする。
- ・授業時間内に答えるために、次のような対応をする。

- ① 質問した以外の生徒・学習者に同じ質問をし、答えを探させる。
- ② その間に、担当教員も適切な答えを探す。

(3) ICT 機器の使い方

最近の授業では効果的に ICT 機器を使用することが多くなり、事前には入念な準備が必要である。しかし、それでも ICT 機器が十分に使えないようなトラブルが発生する。当日の授業でのトラブルは、①ICT 機器を使えない場合の代替の授業を準備する、②当日のトラブルに備えて、授業直前に機器使用を再度確認する、③授業内トラブルに備えて、学内の情報機器担当部署との連携を欠かさない、などで回避するしかない。

4. まとめ

本稿では、国語科教員と日本語教員の「授業中の危機管理」に焦点を当てて考察した。教育実習(模擬実習・教壇実習)において、実習の準備、実習を実際に進めていくためにも大切な事柄の一つである。十分に準備ができていても突発的に発生することがある事案でもある。当日は、授業における柔軟な対応も、必要な準備のひとつであると言える。

参考文献

- 河野俊之 (2003) 『Teach Japanese ～日本語を教えよう～第2版』 凡人社
小島聡子(2006) 『すぐに役立つ日本語の教え方』 第2版 アルク
中西久美子編 (2024) 『動画でわかる 日本語教育実習ガイドブック』 ひつじ書房

第2回教職実践研究交流会の開催

史学科

准教授 鈴木 宏節

2024年10月12日（土）から13日（日）にかけて、昨年度に引き続き、神戸女子大学・三重大学合同の教職実践研究交流会を開催しました。第2回の研究会には、史学科4回生の8名とOG2名、三重大学教育学部の6名（2回生～4回生）が参集。中学校の社会科・歴史分野の模擬授業が企画され、参加者全員による意見交換がおこなわれました。

ポートアイランドキャンパスで実施された研究会では、本学から2名が、三重大学から2名が教壇に立ちました。

〔模擬授業1〕 神戸女子大学 藤澤麗未さん

「中学校社会科・歴史分野・第一次世界大戦に関する授業」

〔模擬授業2〕 三重大学 伊藤瑠有斗さん・下川竜吾さん（共同授業）

「中学校社会科・歴史分野・江戸時代をテーマにした授業」

〔模擬授業3〕 神戸女子大学 大西渚沙さん

「中学校社会科・歴史分野・江戸時代をテーマにした授業」

授業後には質疑応答や意見交換をおこない、それぞれの授業の反省や新たな発見を報告しました。本学の学生からは、「グループワークを取り入れることの大切さに改めて気づいた。アウトプットすることで記憶に残る期間が長く、さらにグループワークで意見交換をすることで印象を強く残すことができる感じた。」という感想がありました。三重大学の学生が附属中学校での「研究授業」を再現したからです。逆に三重大学の学生（3回生・模擬授業担当者）からは、「自分が実践してきた形とは異なる形の授業を受けることで、自分の中での引き出しが広がるということを実感した。自分たちが授業を行ってきたのは附属の学校であり、一般的な学校とは異なっているため、一般的な現場ではどのような授業のニーズがあるのかということを知ることができた。」という感想がありました。

また、「教育実習に行く前は、他の人の授業を見ても面白いのか、面白くないかさえも分からなかったが、教育実習に行ったことで、授業を受ける側になった時に気付けることが増えたと思った。板書の仕方であったり、プリントの内容であったり、正解はないけど、自分だったらこうするなと思う箇所がいくつかあった。」という本学の学生の感想があり、授業を観察する視点が変わったという教育実習の効果検証ができました。

そして、三重大学の学生（2回生）から、「私が一日目の研究会で一番印象に残ったのは《アクティブラーニングのバランス》についての話である。私自身社会科の中で模擬授業をしてくるにあたって、先輩から「もっと対話のある授業に」「もっと生徒が主体となる授業に」などというアドバイスをもらってきた。しかし、今回授業を受ける側になってみてアクティブラーニン

グだけでは必要な知識が身につかないということが分かった。そのため、どこまで生徒を主体とするのか、どこからは教師側から説明するのかということのバランスがとても大切だと思った。」という意見がありました。1回でも多くの授業に主体的に参加観察する必要性が伝わってきます。

今回は第1回目に参加した本学OGが2名駆けつけました。特に、現在は神戸市内の中学校に勤務するOGが、教壇に立つ立場から模擬授業の講評をしてくれました。その結果、本学の学生から、「実際に教育現場で働いているOGの方の意見もとても参考になった。特に、生徒に発言させる機会を与えるというアドバイスが最も印象に残った。ただ発言させるのではなく、意味のある発言をさせるのは難しいことなのでもっと考えなければならないと思った。」という感想を得ることができました。本学のカリキュラムでは異学年交流の機会が少ないのですが、奇しくもそれを補う好機会になりました。また学校で実際に勤務している若い教師の言葉には重みがあります。次年度もOGの参加をひろく募る予定です。

〔エクスカージョン〕 JR三ノ宮駅 → 生田神社 → 神戸ムスリムモスク

生田神社を参観した後に本学三宮キャンパスをまわって神戸ムスリムモスクを訪問しました。モスクでは30分ほど専門の解説を受けた後に施設内を自由にめぐりました。三重大大学の学生(2回生)からは、「(大学に)在籍しているだけで社会の知識がついていくとは限らないと思った。今回でいうと、モスクに行ったり、神戸という名前の由来に深く関わる神社に行ったり、三重大にいただけでは知ることのできないことを学ぶことができたと思った。神戸だけでなく、ほかの地域にも実際に出向いていろいろなことを学んでいきたいと思った。」という感想を得ました。本学の立地を活かした社会見学になったと実感しています。

授業経験を積んでもらいたいというのが当初の目的でしたが、異なる立場の同世代たちと意見交換できる場になってきました。本学の教職科目「教職実践演習」の一環ではありますが、今後もさらに多様な立場から意見交換ができる機会を増やしてゆきたいと考えています。



【写真1】学生による模擬授業の様子



【写真2】現職OGからの講評